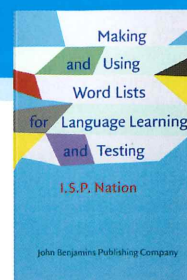


Making and Using Word Lists for Language Learning and Testing

Nation, I.S.P., Amsterdam / Philadelphia: John Benjamins Publishing Company, 2016, 210 pages

Stuart McLean

書籍紹介 1



Word lists are key to good vocabulary course design, the development of graded extensive listening and extensive reading materials, research on the lexical load of materials, and the development of vocabulary test. The book was written for vocabulary researchers and curriculum designers, and describes aspects that need to be considered when they create frequency-based word lists. As a result, Nation's book will save its readers a great deal of time and effort, and help vocabulary researchers and curriculum designers avoid errors when creating word lists and vocabulary tests. Nation states that when making a word list we need to consider the purpose for which the word list is to be used, the design of the corpus from which the word list will be made, the word counting unit, and what should and should not be counted as words. The book

refers to recent research when arguing how list makers should address the above consideration when making word lists. A great deal of the current research is from researchers based in Japan. The book provides very practical guidelines for making word lists for pedagogical and assessment purposes. The book is split into sections that look at the uses of word lists, deciding what to count as words, choosing and preparing the corpus, making the list and using the lists. Among these sections, by far the longest is deciding what to count as a word. Anyone who is making a word list for the first time should read this book to ensure they make their word list efficiently and effectively.

採用学

服部泰宏 著 新潮選書
2016年5月刊 260ページ

船越 多枝

書籍紹介 2



企業にとっての4つの資源、ヒト・モノ・カネ・情報の中で、「ヒトが最も大切な資源である」とよく言われ、近年は「人材」を「人財」と表記する企業も多い。その人財を獲得するために、必ず行われるのが採用である。本書は、この採用に関し、企業側と採用される側の行動を科学的に分析しつつ、実践的な示唆を与えてくれる一冊だ。

本書の素晴らしい点は、学術的分析がしっかり盛り込まれつつも、実務に役立ち、平易に読めることが意識されている点である。著者は、企業での人間行動を研究する組織行動論分野における新進気鋭の経営学者、服部泰宏氏であるが、本書は2016年に人事担当者が選ぶ役立つ書籍（HRアワード書籍部門）の最優秀賞を受賞し、1年で4刷を重ねている。そのような点でも、とくに実務・実践と乖離しがちな日本の社会科学の在り方として学ぶべきところ

が多い。

なお、この文章を読んでいらいっしょる方々には、経営学は自分からは遠い、と感じている方も多いかもしれない。しかし、私たちは、一度は採用される側に立ったことがあるのではないだろうか。また、少子高齢化が進む中、誰もが再び採用される側となる可能性も大いにある。そんな中、「採用する側はどのような基準で選抜するのか」「なぜ内定後に気持ちがざわつきはじめるのか」といったことに興味は起らないだろうか。そんな素朴な疑問や知的好奇心を満たし、経営学を覗き見するという点でも、また教育に携わっている方々には、就職活動中の学生の状況や心理を理解するという点でも、本書は最適の一冊といえるであろう。

言語教師認知の動向

(編著) 笹島茂 西野孝子 江原美明 長嶺寿宣
(著) 小嶋英夫 中田賀之 浅岡千利世 栗原ゆか 中村恵恵子 志村昭暢 伏野久美子
2014年5月刊 213ページ 開拓社

上野 育子

書籍紹介 3



言語教師認知 (Language Teacher Cognition) 研究というワードは日本の英語教育の従事者にとってまだまだ馴染みのない語であるかもしれない。言語教師認知の研究そのものが研究領域として確立したばかりで、既刊の『言語教師認知研究』(笹島・ボーグ (2009)) 内で、「言語教師が何を信じ、何を考え、何を知らず、何を知らずしているのかを探求すること」を言語教師認知研究と呼び、グローバル化する社会の中で大きく変わりつつある言語教育のパラダイムを言語教師の視点から学習者との関係性のなかでアクションリサーチしていくのが言語教師認知研究であると説明されている。ピリフや動機付けの研究をはじめ、EFL 環境である日本においても独自の文脈においての研究が広がっている。

本書は日本の言語教師認知研究の背景に始まり、最近の動向、量的・質的調査などの研究アプローチ、今後の展望と課

題など多岐に触れ、読者は言語教師認知研究の現在の概要がほぼ理解できるようになっている。例えば、量的研究により教師の信条や授業実践の一般的な傾向を調査し、質的研究によりその傾向がどのようなようにして、なぜ起こっているのかを探求している。

言語を学ぶことと同様、言語を教えることは複雑である。だからこそ、その点に焦点を当てた言語教師認知研究で「研究」と「実践」の有機的な融合の相補的關係の構築に貢献しようとする著者たちの思いが伝わってくる。教師自身が日々の実践を振り返るきっかけとして言語教師認知研究の意義が広がり、そのことによって学習者たちのさらなる学びにつながる事が期待される。